アカシア俳句会

春季俳句会（令和三年三月）「句報」（兼題：早春、浅春、花、子季語含む）

「選句」赤文字：特選

「投句」作品	作者
圭 天折の母と心ブラ早春夢	戸堂博之
訓志 子が丑に替はる明日や初詣	戸堂博之
蝶の如まゆみも舞ふて豪で金	戸堂博之
掛け違うて庭で笑うやぼたんのメ	戸堂博之
多 今生に疲れし春や遺言状	戸堂博之
陽 梅が香やコロナに馳せる我が思い	吉澤志保子
土筆にはまだ早からん土手の午後	吉澤志保子
恵陽崎訓 浅春や「花」を奏でる古ピアノ	吉澤志保子
亘 春近し掘割の水煌めけり	吉澤志保子
由 稲妻に似たる水菜を喰らうかな	吉澤志保子
恵 春浅し思はずすくむドア一歩	前田秀一
亘徳 早春や十八寡黙試練の日	前田秀一
紅梅や晴天に一輪開きけり	前田秀一
土起こし匂ひの新た花の園	前田秀一
多 語りかくる備前の地味や山椿	前田秀一
以 花ひとつ足元寒し浅き春	都福仁
弘川寺丘の碑に花西行忌	都福仁
展崎志 三寒にコロナ禍耐えて四温かな	都福仁
空青く目白の緑春の色	都福仁
山と海行き先迷う春の旅	都福仁
多秀崎 病癒えて退院の許可春近し	西村敏治
佑 逼迫の医療を憂い我病臥	西村敏治
新年やみどり児の眸に希望見ゆ	西村敏治
多陽 冬銀河明るく認む目の術後	西村敏治
医者不足かねて叫ばれ冬コロナ	西村敏治

亘崎克　風花に敷き砂濡るる竜安寺　本多通博
佛に向き合ふて書く賀状かな　本多通博
敏佑　ドカ雪の却って四温の気配かな　本多通博
以福博亘　富士と五湖肝胆相照初日の出　本多通博
藻に触れて素足こそばゆ春の川　本多通博

福　立春や車庫の車の出払ひぬ　中野陽典
展訓　三叉路へ風の抜け行く余寒かな　中野陽典
志　啓蟄の空き家の庭の月明かり　中野陽典
以　流し雛漕ぎ手鉢巻き新調す　中野陽典
徳以展　鶯や声もたてずに庭の隅　中野陽典
蘆の角小魚泳ぐ水の底　中野陽典
博　花冷えや生きているやら疎開の子　中野陽典

佑茂　カリカリと猫の餌を食む年来る夜　富岡訓子
冴え返る空満月の凛として　富岡訓子
恵福　雨上り土よりかすかかおる春　富岡訓子
菜の花や延びて仏壇いでて咲く　富岡訓子
展　友の来る淋しい部屋と春浅し　富岡訓子

秀亘佑　立春や歩き始めのフェルト靴　佐藤多恵子
敏以　よちよちと児は影を踏み浅き春　佐藤多恵子
白梅の北国街道行き行けり　佐藤多恵子
展克　「齢やまひだのう」とぞ姑の春炬燵　佐藤多恵子
訓博　多喜二忌を知るも知らぬも蟹食ぶ　佐藤多恵子

コロナ禍も探梅客の衰えず　吉田以登
コロナ禍や川土手歩くのみの春　吉田以登
君子蘭蕾を上ぐる気負うかに　吉田以登
春早し宮の奥山水車の音　吉田以登
由　早春の川土手トランペットの音　吉田以登

秀恵　ぼちぼちと母とゆく道春近し　野本展子
鳥若葉川のせせらぎ皆笑う　野本展子
陽　コロナ避け子ら外遊び梅開く　野本展子
浅春の公園賑やかなりし今日　野本展子

訓博　すべきこと日々満ち余る老いの春　網佑子
克　春まだき撮るにむつかし群雀　網佑子
敏徳　待ちかねし春の雪舞ふ軽やかに　網佑子
多　蝋梅のやや透きとほり香の優し　網佑子
由　囀りに身をつつまるる朝餉どき　網佑子

克	夫を送る心友二人冴え返る	山家由紀
佑敏	ミャンマーの政変憎む春の宵	山家由紀
徳	陽光の射し入るひと日家居かな	山家由紀
	「春一番」漁師ことばでありしとか	山家由紀
	地球外生命体探査春うらら	山家由紀
博	日だまりを選び咲きいる梅の花	佐藤茂弘
	茶がうまい笑顔の妻と春迎ふ	佐藤茂弘
	水仙は毎日背伸び青々と	佐藤茂弘
	春なれど写真ながめて旅気分	佐藤茂弘
	薔薇の芽はぼつぼつ動けと言つている	佐藤茂弘
由	思い出は朧ろになりぬ朧月	中野亘子
秀	雨催い蝋梅の香の強まりぬ	中野亘子
恵敏福徳	春の陽に手かざして笑む癒えし人	中野亘子
	腰痛は春草摘みの罪ならし	中野亘子
由克福陽秀	葉のしずく軒端のしずく春の雨	中野亘子

【選句についてお願い】

一、お一人五句選句して頂き、その「句番号」をお寄せください。

二、選句の内「特選句」一句の番号の後ろに「特選」と記入して下さい。

三、「特選句」について、五〇文字以内で句評をお願いできればなお結構です。

投句、選句者氏名

（　）内は選句者略号（五十音順）

網　佑子（佑）、井狩　修（修）、岩崎悦子（崎）岩壷克哉（克）、加龍惠子（恵）楠野圭子（圭）、小松康子（康）、斎藤優子（優）、佐藤多恵子（多）、佐藤茂弘（茂）、戸堂博之（博）、富岡訓子（訓）、中野亘子（亘）、中野陽典（陽）、西村敏治（敏）、野本展子（展）、本多通博（通）、前田秀一（秀）、三木徳彦（徳）、都　福仁（福）、宮本智乃（智）、元永悦子（永）、山家由紀（由）、吉澤志保子（志）吉田以登（以）